

しまねっこ さん

『介護する側になって』

深夜二時、再び名前を呼ぶ声で目が覚めた。体はまだ布団に沈み込みたがっているのに、心臓だけが急かすように早鐘を打つ。立ち上がり、ふらつく足で部屋に入ると、そこには不安そうな母の顔があった。「トイレ…」その一言に、私は慌てて体を支える。けれど思うように動いてくれない身体は重く、私の腕からずり落ちそうになる。必死で抱きかかえるのに、「痛い、やめて」と拒まれる。胸の奥で何かが崩れた気がした。私は何をしているのだろう。助けたいのに、怒りと涙が同時に込み上げてくる。息が詰まりそうになりながらも、誰にも聞こえない声で「もう無理だ」と呟いた。けれど、その手を離すことはできない。たとえ心が削れても、ここで支えるのは私しかないのだ。暗闇の中、静かに震えるその背中を支えながら、当時の私は自分の弱さと、介護という現実の重さを痛感していた。母なき今、あの時の私の感情を胸にしまい今日を生きている。

【応募者コメント】 介護は介護する人の健康も大事だと思いながら書きました。